

ミニシンポ「和歌山城の近代・現代—天守閣再建 60 年を考える—」趣旨説明

今年、和歌山城天守閣が再建されて 60 年の節目の年にあたります。江戸時代後期に再建された天守閣は、昭和 20 年（1945）7 月 9 日の和歌山大空襲で焼失しました。市街地の復興が完了しないなかで、天守閣を復元することに異論もありましたが、市民から多額の寄付があり、昭和 33 年 10 月 1 日に再建されました。

当時の人々は、なぜここまで天守閣の再建に情熱を注いだのでしょうか。それは、天守閣がかつての為政者の支配装置としてではなく、郷土のシンボルと捉えられていたからではないかと思います。戦災で失われた天守閣を自分たちの手でよみがえらせることが、戦後の市街地の復興において象徴的な意味をもったのでしょう。

こうした天守閣への市民の愛着は、近代以降に城跡の性格が変化するなかで次第に醸成されたと考えられます。一般に近世の城郭は、軍事施設として整備され、藩の政庁と殿様の居館を兼ねた施設として機能しました。そのため、江戸時代には城内への出入りは厳しく規制されました。しかし、近代にはこのような城本来の役割は失われ、不要となった建物の多くが廃絶します。その結果、市街の中心に広大なオープンスペースが形成され、城跡の多くは市民が憩う緑地公園としてその姿を変えました。

和歌山城でも、かつての内郭は陸軍の管轄期を経て、明治 34 年（1901）に和歌山公園として公開されます。大正 4 年（1915）には、大正天皇の御大典を記念して「和歌山公園設計案」が策定され、本格的に公園の整備に乗り出します。この計画は、当時、東京帝国大学教授であった本多静六（林学博士）が策定しました。本多は、日比谷公園（東京都）など公園の設計を各地で手がけた人物であり、当代随一の権威といえます。しかし、本多の計画は城の遺構を一部破壊する案だったため、地元で異論が噴出し、変更を余儀なくされます。

この事例では、城跡を公園とみる立場と、藩政期の遺構を残す史跡とみる立場の違いが鮮明になりました。こうした対立は、近代の城跡がもつ多様な側面を物語っているといえます。近年、文化財学の分野では、近世城郭の史跡としての価値を、近代以降の履歴も含めて検討する必要性が提起されています。この指摘を踏まえるならば、和歌山城においても、近代における公園整備の実態や整備に至るまでの動向を具体的に明らかにし、城跡と市民とのつながりを歴史的に検証することが求められると考えます。

以上のような問題意識に基づき、本大会では、戦後の天守閣再建を、近代以降の和歌山城の歩みのなかで位置づけ、その歴史的意義を考えるためにミニシンポを企画しました。シンポでは、和歌山城の近代・現代に造詣の深いお二人に報告をお願いしました。

野中勝利さんには、基調講演として「大正期の和歌山公園設計と整備について」という演題でご報告いただきます。野中さんは、早稲田大学大学院で建築工学を修め、現在は筑波大学芸術系の教授でいらっしゃいます。城跡の近代化について精力的に研究されており、和歌山公園に関しては、昨年 3 本の論文を相次いで公表されました。今回の基調講演では、

本多静六による和歌山公園設計の内容と、それに対する地元の反応、その後の整備の実態についてご報告いただきます。全国的な視野に立って、和歌山城の事例を位置づけていただけると思われます。

大山僚介さんには、「戦後の和歌山城天守閣再建をめぐる動向」という演題で関連報告をお願いしました。大山さんは日本近代史が専門で、現在は和歌山市和歌山城整備企画課学芸員として、和歌山城の近代について精力的に研究されています。大山報告では、戦後の天守閣再建をめぐる論争やあつれき、寄付の実態などを詳細に検討し、再建の過程を歴史的に跡づけます。

和歌山城は、和歌山の地方史において重要なテーマですが、近代以降の歴史はこれまであまり注目されてきませんでした。しかし、現在の和歌山城が都市公園・観光地として多くの方々に親しまれていることを念頭に置けば、近代以降の動向のなかでその源流を探ることも重要であると考えます。両報告を通じて、和歌山城の新たな側面に光をあてることができれば幸いです。